

島のむんがたり

新生活様式と酒
～史料に見る酒事情～

新型コロナウイルス感染症の流行は社会生活に様々な変化をもたらしています。例えば、「オンライン飲み会」「黙食」。コロナは酒の飲み方をも変えつつあるようです。

日本民俗学の祖とされる柳田国男は『明治大正史世相編』の中で、明治・大正になり「独酌」が進んだことを指摘し、酒の飲み方の変化に着目しています。

徳之島における酒の飲み方にもレパートリーがあります。8月



(写真1)

(写真2)

大島酒造組合連合会
徳之島酒造組合
小賣業者各位殿

昭和二十八年九月十二日

一千田

一、あわもり 正一斗御値

大島酒造組合連合会の決議に依り来る九月十五日よりあわもりの価格を左記の通り協定嚴重に実施致しますなお右價かくを崩す業者を発見証據提出される方にはホウ賞として金壹万円也贈呈致します

廣 告

群島の「日本復帰」が待っています。この記事の3ヶ月後には奄美

15日の送り盆に際し、亀津・亀徳集落で見られるお墓での先祖との「共食」もその一つです(写真1)。コロナも島の人びとと先祖の結びつきを奪い去ることはできないのではないのでしょうか。

さて、次の史料は昭和28年(1953年)9月15日付の「南西日報」46号に掲載された「広告」です(写真2)。「泡盛」の協定価格の「厳守」を報價付きで宣伝しています。現在、奄美群島の酒と言えば「黒糖焼酎」ですが、かつては「泡盛」もつくられていました。この記事の3ヶ月後には奄美

から鹿児島に「上国(じょうこく)」した島役人の日記(「道統上国日記」)を見てみます。

藩元で「御祝儀」があると奄美諸島の島役人は鹿児島に召し出され、島々の産物などを差し上げなければなりませんでした。しかしその旅路は七島灘など難所も多く、危険でした。そのため、大島・喜界島・沖永良部島の島役人が無事鹿児島に到着した際、徳之島の島役人から彼らに対し「着之祝儀」として「御肴」・「御酒」を贈ったという記事があります(文久三年七月晦日条)。同じ境遇にある者同士の共感と現代にも続く贈答品としての酒の役割がうかがえます。

以上、断片的に徳之島の酒に関する史料を紹介しました。「新生活様式」という言葉のもと、私たちの生活・慣習も変わることが想定されます。「現在」が歴史の重要な転換点である可能性があり、町誌編纂とともに日々の記録の大切さを痛感しています。

(町誌編纂室 竹原祐樹)

もう少し時

をさかのぼり、約150年前に徳之島

問 郷土資料館

☎ 0997-82-2908